

2009年 秋期 保護者会資料 Contents - 目次 -

ご挨拶	…………… P.2～P.5
国語科より	…………… P.6～P.13
数学科より	…………… P.14～P.17
英語科より	…………… P.18～P.27

ご 挨拶

大学受験グノーブル 代表：中山 伸幸（英語担当）

本日はお忙しい中、保護者会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

グノーブル発足から3年あまりが経ちました。お陰様で、難関とされる大学の合格者数は、卒業生たちの頑張り、塾の規模に比して高い水準で伸びてきています。また、卒業生・在塾生・保護者の皆様のご紹介で、生徒数も少しずつ増えて参りました。この場を借りて、あらためて感謝申し上げます。

この3年間、グノーブルで学ぶ生徒たちの学習環境をより良いものにすべく、職員一同努めて参りました。教室の確保、警備の充実、教材開発、指導法の研磨など、ハード・ソフト両面の整備に力を注いできたつもりですが、まだまだ至らぬことも少なくないと思います。この保護者会を機会にお気づきの点をご指摘ください。一步一步改善に努めていく所存です。

また、本日の保護者会では、各担当から、クラスの様子、今後の予定、指導方針などについてお話しさせていただく予定です。余裕がございましたら、その全体会の後で担当者にぜひお声掛けください。日頃のお子様の様子などお聞かせくだされば幸いです。これからのお子様の指導やクラス作りの参考にさせていただきたいと思っております。

学習環境の整備

どんな学習環境に身を置けるか。このことは生徒たちにとっては何よりも大切なことです。

その環境を左右する要因はいくつか挙げられますが、第一は先生でしょう。担当する先生によって教室の空気は大きく変わるものです。「さあ、やろう!」、「気がついたら夢中になっていた」と、生徒たちが思えるかどうかは、先生に依るところが大きいことを私たちも自覚しています。「情熱があり技術・知識を備え、生徒一人ひとりの顔が見える指導者」になれるよう、これからも日々努めていきます。

次に、黒板に書かれる例題、手にするテキスト・プリントにある問題の一つ一つは、生徒たちの意欲や達成感に大きく影響します。また、今の大学受験を分析することに加え、大学入学後を見据えたカリキュラムの策定も生徒の将来に大きな責任を負います。生徒たちが大学受験で成果を手にし、その先の夢に向かって歩き続けられる礎になるカリキュラム・教材作成に今後も工夫を加え続けていくつもりです。

先生と教材に加え、良きライバルが集う場であることも、学習塾に大切な要素でしょう。卒業した三期生も、ライバルが身近に感じられる環境の大切さを語ってくれました。

今年の春、東大前期発表の2日後、その東大に合格を果たした7人の生徒たちから話をじっくり聞く機会を持ちました*。その際、ひとりの出席者が次のような発言をしたときには周りの出席者も大きく肯いたのでした。

*7人のインタビューは『3期生 合格者の声』に収録されています。

「おそらく、グノーブルが他の進学塾と違うだろうと思うところは、優秀な人の存在を身近に意識できるということじゃないでしょうか。優秀な人がいたとしても、その人がどれほど優れているのかが分からない。グノーブルの場合、先生方と生徒が近い距離感にあって、頻繁に生徒を当てて答えさせるんです。そのとき自然とまわりの人の優秀さが身にしみて分かるんです。これは大きな刺激になりますよね。」

(竹田萌子さん [東京大学文科I類1年、女子学院出身])

教える側の私たちが生徒を当てるとき、その主な意図は、一人ひとりの成長を見るためと、一定の

緊張感を保つためなのですが、指名されていない生徒たちの刺激にもなっていたというのは、私たちにとっても新たな発見でした。

集中力を育む教室（ミラーニューロン）

「教える側が技術・知識を備えていること」、「良きライバルが集うこと」。これらの大切さは、ミラーニューロンによっても裏付けられるように思います。

このところ、各メディアで脳科学をテーマにすることがしばしばありますが、その中で、1996年に発見されたミラーニューロンがときに取り上げられています。その名の通り、ミラーニューロンとは「鏡の神経細胞」で、他人の行為を、まるで自分の行為のように映し出す特性を持っているのだそうです。たとえば、映画館で悲しい境遇にある主人公を見ながら、それがまるで自分のことであるように感じて涙がこみ上げてくるのは、ミラーニューロンが、スクリーンで起こっていることを自分のものとして再現しているからだと言われています。ミラーニューロンのおかげで、私たちは他人の行為を非常に微妙なところまで自分のこととして実感できるのです。「実感できる」ということは、実際に自分でやってみるような学習効果も大いに期待できるということです。

(参考文献：早川書房『ミラーニューロンの発見』マルコ・イアコポーニ著)

これで、私が思い起こすのはタイプライターの操作です。私が学生だったのはパソコンが普及する何年も前のことでしたし、日本人の中でタイプライターを自在に操れる人は多くありませんでした。大学側へのレポート提出にタイプライターを義務づけられた私たちは、ブラインドタッチができるようになるまで、毎日かなり頑張って意識的に努力をしなければなりません。

その後、ワープロが登場し、パソコンが普通に各家庭に置かれる世の中になりました。今の子供たちの多くは、意識的努力は大してせずキーボードを操れるようになりますが、これには環境が大きく影響していると思います。小さなころから、自宅にはパソコンがありキーボードに普通に触れますし、周りにはキーボードを普通の道具として操作する人はたくさんいます。他人が巧みに操作するのを目にする度に、脳内のミラーニューロンが発火*して自然に学習効果を上げていると考えられます。

*発火=ニューロン内部の電位が突然高くなること。

教える現場の実感としては、「先生の理解の深さが、生徒の理解度に違いを及ぼす」ということが挙げられます。授業のために準備したノートを常に見なければ板書もおぼつかない、という先生の行為を見ていても、生徒のミラーニューロンもその程度にしか反応しないことになり、そこから得られる学習効果は乏しいでしょう。逆に、教える側が精通していることは、生徒の理解も速く、定着度にも違いが現れます。

また、ある卒業生は「英語を読むときの心の中の声が中山先生の口調になりました」というコメントを残してくれました。「数学の問題を前にしてどう発想するかは、教わる先生にすぐ影響を受けます」と言っていた別の生徒もいました。私たちの及ぼす影響は、結構深いものがあるかもしれません。（「自己研鑽を怠れない」、というこちら側の刺激になります。）

教室の雰囲気作りはまた、生徒たちが集中力を育む上で大切でしょう。持続して集中できる生徒たちは順調に成績を伸ばせる、とかねがね思ってきましたが、集中力は主体的な姿勢からしか生まれません。先生や保護者に強制されてやる勉強がきっかけになることはあるかもしれませんが、中学生・高校生の場合、強制されて始めたことはせいぜい一時的な効果しか生まないでしょう。しかし、良い仲間、良いライバルが集まる教室の中でなら、いつのまにか主体的な姿勢で教材に向かっていて、という効果が生まれます。互いの様子を無意識のうちにも感じることで、生徒たちのミラーニューロンが自然に発火しているのではないのでしょうか。

グノーブルの授業では演習と直後の解説を大切にしていますが、演習が始まると自然に集中して取り組むという環境は、どのクラスでもほぼ確立されていると思います。

問題は宿題の励行、復習の習慣化です。こちらの方が授業外での努力が関わるだけに実現にはハー

ドルが高く、時間がかかるものです。だからといって大人の強制力の行使では一時的な成果しか得られません。教室全体の空気が「宿題・復習は当たり前」というものになれば、一人ひとりの生徒が主体的な姿勢になりクラス全体の成績が伸びていくこととなります。すべてのクラスでこうした環境が整うことを目標に、私たちもクラス作りをしているところです。

時代の求める学力

次に、「受験にしか通用しない指導」ではなく、「受験にも力を発揮し、その先にも活かせる指導」という点について、私の担当科目である英語を例に述べてみましょう。

新政権の発足した翌日の新聞に『発信は英語の論理構成で』(9/17 朝日新聞朝刊 鳥飼玖美子立教大教授)という記事が掲載されていました。鳩山首相の英語論文に触れ、ニューヨーク・タイムズ紙に掲載されたものについては英語の論理構成に則ったものとして評価し、さらに、海外の読者を想定して英語で発信するときには日本的発想から抜け出すことが大切、という点を強調する記事でした。

受験問題に目を向けてみると、東大の入試問題、英語第1問(A)、(B)はまさに英語の論理構成を問う問題になっています。国際的に活躍する人材を求める東大らしい問題と言えます。

(A)は、短めの英文から最も重要な主張を読み取る要約問題。(B)は、長めの英文を題材に、複数のパラグラフを論理的に並べるパラグラフ整序問題が中心です。どちらも日本型の論理展開に慣れている受験生たちが大いにてこずる問題ですが、グノーブルでは発足時から、英語の論理構成を身につけることを主眼とした教材を用意しています。特に高3生では毎回の授業で扱います。

しかし、英語が、日本語と異なっているのは、論理展開だけではありません。ひとつひとつの文の組み立て、発想法、視点のとり方も大きく異なることがあります。

たとえば、やはり新政権誕生翌日の英字新聞一面には“Nation sees historic change”(9/17 THE DAILY YOMIURI)という大見出しが載りました。普通の日本語では、国を主語に立てて「国が歴史的変化を目撃」という言い方は一般的ではないと思いますが、この手の表現は英語では珍しくありません。次の例はここ最近見かけたものです。

The 20th century saw ... 「20世紀は…を目の当たりにした」
the USA witnessed ... 「合衆国は…を目撃した」
Nature's long history has seen ... 「自然界の長い歴史は…を見てきた」

英語話者の視点の置き方は、明らかに日本語話者とは異なるように思われます。次の例は、上に挙げた、高所から見下ろすような視点に立ったものではありませんが、やはり日本語とは視点が異なります。

About the Illustrator

GARRY PARSONS studied fine art at Canterbury and went on to study illustration at the University of Brighton. His work has won him several prizes, ...

(SIMON & SCHUSTER 『GEORGE'S COSMIC TREASURE HUNT』 LUCY & STEPHEN HAWKING)

「イラストレーターについて

ゲーリー・パーソンズはカンタベリーで美術を学び、続いてイラストをブライトン大学で学んだ。
彼の作品が彼にさまざまな賞を勝ち取らせた、…」

波線をつけた部分は、日本語としては不自然ですが、英語で物事を見るとき視点の取り方を表現したみた直訳です。

この例も含め、Nation sees ... 以降挙げてきた例の主語は、「無生物主語」と呼ばれているものです。

多くの受験参考書ではそのための項目を立て、自然な日本語に訳すための指導が細かく載っています。次はその一例です。

The bad weather made us cancel the game.

…直訳すると「悪天候がぼくらにその試合を中止させた。」となる。これを「ぼくら」を中心に解釈すると、「悪天候のために、ぼくらは試合を中止した。」と、より自然な日本語にすることができる。

(桐原書店『総合英語 FOREST』)

親切な解説で分かりやすく、初学者には適していると思います。これ以外の参考書でも、自然な日本語にするための工夫にページを割いています。

しかし、ここにひとつ気をつけなくてはならないことがあると思います。

自然な日本語訳を重視するよりも、英語の視点の置き方に重点を置くべきではないか、ということです。英語的発想を、いちいち日本語的発想に引きつけて解釈する習慣を強いることは、生徒たちの英語力を伸ばす上では障害になり得るかもしれません。「英語を使おうとすると日本語が大きな邪魔をする」という感覚は、実用英語を身につけようとする多くの学習者が実感していることです。日本語の伝統も大切にしつつ、頭の中には別系統の英語感覚を養っていくことが、次代に活躍する生徒たちには必要なことだと思います。

紙幅が足りず、これ以上は踏み込んで書けないことをお許しください。グノーブルが目指しているのが「受験の先にも活かせる指導」だということをご理解いただければ幸いです。また、そのような指導は大学受験で活躍する実力を養うのにも近道であることは、卒業生たちが実証してくれていると思います。

なお、具体的な指導法に関しては、昨年出版した、拙著「英語 スピード読解力」(このページ右下)も併せてお読みいただければ幸甚に存じます。

最後に、卒業生の高田修太君〔東京大学理科Ⅱ類2年、開成出身〕からこの春届いたメールを紹介します。

「このたび、日米学生会議の試験に合格し、今夏参加することになりました。正直、東大に受かったよりも嬉しいです(笑)。試験は英語でのディスカッションや面接、ペーパーテスト等がありましたが、帰国子女でもない僕が、数百人の受験者から選ばれる28名になんとか選出されたのは、GNOBLEで学んで、飛躍的に英語が伸びたからこそだと思います。本当にありがとうございました。」

メールで話題になっている日米学生会議は、1934年に発足した伝統ある学生交流です。毎年、およそ1か月、英語での共同生活を送りながら、両国をめぐるさまざまな事柄についてディスカッションを重ね、その成果を社会貢献につなげようという活動を行っています。

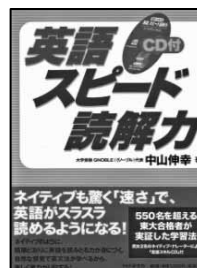
もちろんご本人の努力がメンバーへの選出につながったに違いありませんが、私たちの指導もいくらか貢献できたかもしれないと考え、大変嬉しくメールを受け取りました。

さて、大学受験に向けて、また、その先の活躍に向けて、英語、国語、数学の「今」の勉強は、具体的にはどのように取り組めば良いでしょうか。

ぜひ、この「保護者会資料」に収められた各科目のページをご覧ください。また、本日の担当者からの話をお聞きくださいますようお願いいたします。



日米学生会議に出席した高田修太君は、サビックス小学部発行「さびあ10月号」に紹介されました。



- ・全国有名書店にて、好評発売中。
PHP研究所 価格1,575円(税込)
- ・amazon.co.jp なら、送料無料です。
<http://www.amazon.co.jp/>
- ・グノーブル新宿本館受付でも販売中！
本館受付では特別価格1,500円(税込)にて販売しています。

国語科・数学科・英語科としてのスタンス、指導方針に変更はありませんので、以下の資料は、原則昨年と同様の内容となっております。

国語科より

国語担当：行村 真治

1 はじめに

「〇〇さんは国語ができる」

このように人から評される方は、どのような方でしょうか。授業で生徒の方に聞いてみました。出てきた意見は、「読解力がある」「本をよく読んでいる」「ものをよく知っている」「背景をつかんでいる」「文章力がある」などなどです。どれも正解だと思います。しかし抽象的であり、学ぶ生徒にとっても力がついたと実感しづらい項目が並んでいます。

さらに、ここには重要な点があります。実はこれらに該当していても「国語ができる」と言われない場合があるのです。現実的な発言ですが、一つ当然すぎるにもかかわらず、見落としがちなポイントがあります。

現実問題として、国語のできる方とは「テストで点が取れる人」、しかも「安定して点の取れる人」ということになると思います。なお、出題範囲が限定されていて、授業内容を踏まえて書くことで点の取れるような、学校の定期テストは、ここでいうテストではありません。過去、解答欄を埋めてさえいれば0点とはならないという定期テストがあったと聞いたことがあります。それは「励まし」にはなっても、本人のためになるとは全く思えないと感じました。やはり、未知の文章を読み自力で正解となる解答を出すことが求められるテストを対象にして考えたいものです。

では、安定して点が取れる人とはどのような方でしょうか。逆に考えると、点が思うように取れない場合、原因はどこにあるのでしょうか。

その前に、まず国語という科目の特徴を考えておくべきだと思います。

2 「国語」のとらえ方

国語という教科はその特徴から以下の2種類に分けられると考えています。

①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、そ

の奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、受験に直接的に役立ちません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいたにもかかわらず、中学高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかというのが自分の意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語による表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要な位置づけにある科目だと思います。グノーブルのカリキュラムでは「鑑賞の国語」も重視します。

(参考)

中学生の授業内で、問題文に「考察しなさい」と表現してあるものを時々設けています。これは「鑑賞の国語」に属する学習だというメッセージです。本文には根拠が明確に書かれていないが、このような味わい方も可能だということを提案してある問題だと考えてください。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います(次の項目でもう一度整理して説明します)。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっとこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうすると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理するという一面がなければなりません。

「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」

確かに「書」、つまり書かれたものは全てを語りきつてはいないのですが、情報処理にあたっては、やはり「書」を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手(作問者)が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。グノーブルでは、中3のカリキ

ラムからこの要素を取り入れ始め、高校では情報処理に徹する国語力、すなわち受験に直結した国語力の養成に努めていきます。

以下、「情報処理の国語」について述べます。

3 「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去誰もが見たことのある表現でしょうが、

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれている内容です。実は、国語の学習に必要なことの全てが、実はここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

・「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

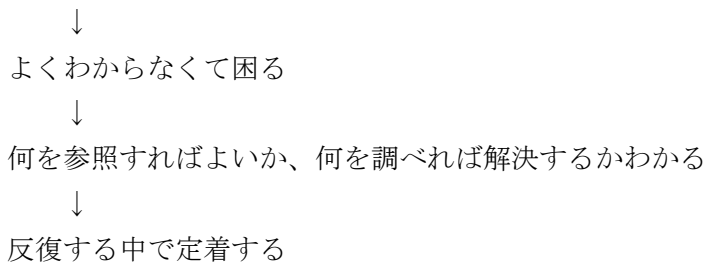
決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません(当然です)。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまづいてしまう原因(つまり何をしなければならないのか)

- ①語彙力の不足。
- ②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない。
- ③文法が定着していない。(古典分野のみ)

以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字(言語)に触れる量ということになります。②は非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現在どのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、正直無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまいます。あくまで実際の文章に触れていき、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

まず読んでみる



幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

・「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です（高校の現代文授業において、記述問題では、解答の「構成能力」と表現しています）。

問いに答えなくてもよいという出題はあり得ません（当然です）。かならず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。与えられた文字情報（つまり文章）を正確につかむこと、つまり「次の文章を読み」に対応する部分では、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この段階で求められているのは「他の人物との対話」です。すなわち「作問者との対話」そして「採点者との対話」です。よって、作問者が何を求めているかは当然ながら問題文を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単なる傍線部の解釈でしょう。情報处理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいことになります。しかし「どういうことと考えられるか」と表現してあったら、「本文にそのまま答となる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

①設問趣旨を的確につかむ。

*本文から手がかりを十分に拾う。

②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨の把握と、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまでアドバイスとして、意識していただきたいことを提案してきましたが、実際

には苦勞している方が多いのも事実です。その現状を把握して差し上げて、具体的なアドバイスができればと思っています。

授業で生徒の方と触れる中で、苦勞されている方のタイプがいくつか思い当たります。

① 代入型

特に古文に多いのですが、学んだことをそのままあてはめているだけのタイプです。「点」で読んでいて、「線」すなわち文脈から手がかりを拾って運用する力が養われていない方です。一例を挙げると、古文単語「聞こゆ」には様々な意味がありますが、出てきたらとにかく「申し上げる」と訳してしまうようなタイプです。他の部分に敬語が出てきていないのだから、ここだけ敬語が用いられるわけではない、という全体から手がかりを見つけて考察する「視野」を養成してほしいと考えてアドバイスに努めています。

② ミステリアス型（免罪符型）

「やっても無駄」「やっても伸びない科目だ」と位置づけるタイプ。そうすると努力しなくても良いことになってしまいます。たしかに、特に現代文はすぐに実感がわきづらい科目でしょうが、やっても伸びない科目だったら、そもそもテストに出すべきではありません。芸術的な素養のようなものを求める科目ではないと考えておきたいものです。そもそも国語がテストの科目となっているのは、採点できる要素、得点化できる要素があるからです。つまり、情報处理的な要素があるのです。いいわけを作らずに取り組んでほしいと切に願います。

過去の生徒さんから考えるに、実際、大学受験において全教科が万全の状態の本番に臨む方はきわめて少数だと思います。そうなると手があまりまわらない科目が出てきてしまうものです。特に理系に進む方はそれが国語となる場合も多いでしょうが、特にセンター試験のような情報処理に徹する形式の問題に触れると、ミステリアスでやっても無駄な科目だという言い訳はできないと気づくでしょう。ある程度真摯に取り組むことは必要です。やって報われるから受験科目にあるのです。

とにかく、ただ漠然と「活字に多く触れて読解力を養いましょう」というようなアドバイスは、自分の学力向上が実感しづらく、学ぶ必然性も感じづらくなると思いますので極力言わないようにしています。授業においては、「なぜできなかったか、わかる」「何が分からないか、わかる」「何を調べれば解決するか、わかる」ということを各自に意識してもらい、今後の課題を明確化していただけるように努めています。

授業でお会いする方については、添削などを通してどの部分が不足しているのかをなるべく具体的にアドバイスするようにしていますし、それが使命だと考えます。こ

の姿勢は堅持します。

*以下は事務的な連絡なので常体で記します。

4 スケジュール

総論として、大学受験を念頭に置くと、現実的に考えて高3の段階で国語に手が回らないであろうというのが大前提である。よって、まず中学時代に、文章を読む力、すなわち「次の文章を読み」に対応できる力の充実を目指すことを提案している。そして、高1で古文を読む力を定着させ、高2で現代文における解答能力を養成して、高3をむかえる、というスケジュールが理想だと考え、その前提に立ってスケジュールを提案している。

①中2～3

古文

未知の古文を読み解くために必要な力（文法力、背景の理解、単語力）のつけ方を具体的に提案し、今後の学習を円滑にできるようにする。文法分野は大学受験に必要な内容を一通り終える（中2前半）。ただ「何をすれば解決するかわかる」「調べればわかる」状態をこの時点でのゴールと考えるので、今後、記憶の徹底、適切な運用のため演習を重ねる必要はある。その充実を目指すため演習を繰り返す機会が中3で、「大鏡」「源氏物語」などを題材に未知の文章を自力で読み解くことができるための力を養っていただけるように努めている。

現代文

まだ「受験国語」に特化しなくてもよい時期と考えている。中2後半は明治時代から昭和半ばまでに活躍した文学者について、その背景を学び、なぜそのような文学がこの世に生まれ、受け入れられていったかを流れの中でつかむことを提案し、今後の読書力に活かしてもらいたいという内容。その後扱う題材も、夏目漱石「こころ」など、中学生レベルとしては難易度の高いものばかりとなるが、このような学習をじっくりできることが一貫校に通うメリットではと考え、あえて進学塾ながら徹底的に扱っている。なお、余談ながら、過去この授業を前向きにエンジョイしてくれた生徒の受験結果は極めて良好である。

さらに中3では、中島敦「山月記」、芥川龍之介の「舞踏会」、森鴎外の「舞姫」などの作品を読み、「情緒の国語学習」を楽しみながら、同時に「情報処理の国語力」も充実していただけるように努めている。

②高校

前述した内容であるが繰り返すと、当塾に通っていただいている方を、過去に担当させていただいた方も加えて考えると、圧倒的に国公立大を目指す方が多い。そうになると、高3では国語にじっくりと時間を費やすことは現実として難しい方が多いということになる。グノーブルでは高3の国語も開講するが、これはあくまで「国語の問題にあたる場を提供し、解く感覚が鈍らないようにすること」が目的であり、体系立てて基礎から解説する授業ではない。

高1から高2までの間に、国語という科目について学習法を確立してほしいと考えている。

古文

基本的な文法事項を学び、さらに演習の中で定着するには1年間と決めて集中的に学んでいくことを提案している。特に理系の方は高3時点で基礎から学ぶ余裕はないと思われる。原則高1で全体像を把握できていて、あとは単語力を充実させながら受験問題にふれて得点力を養うことのみで上の学年にあがってほしいと思っている。

なお、上記の「中2～3」に示したようにグノーブルでも中学時代に一通り学習して高校生を迎えることになる。これは、一貫校のスケジュールとも言えるので、高校受験を経て高校に進学した方にとって、追いつくためには高1時点の学習が極めて重要だと思う。過去、高1で、レベル分けしたクラスの上位を担当した経験があるが、8～9割程度は高校受験を経ていない一貫校の方だった。

いずれにしても、スケジュール的に言うと高1で古文をしっかりとっておくというのは理にかなっていると確信している。

現代文

得点力の充実に特化した授業を行っている。ここでは例として選択肢問題について述べてみる。授業で、以下の手順を徹底できるようにと提案している。

- ①設問趣旨をつかみ、
- ②正答に至るための手がかりを探し、
- ③どういう答が正答として提示されうるかある程度メド立てをし、
- ④各選択肢の要素を吟味し、
- ⑤先入観を入れず無難なものを選び、
- ⑥見直す。

記述問題については、上記の①～②は同様であり、そのあと適切にまとめて行くことができているかを各自の作成答案を添削しながらアドバイスするようにしている。いずれの形式においても、「正確な言語的情報処理能力の確立」を目指している。

5 2010年について

現在の予定では、来年度、中2の国語は開講しないこととしました。

「鑑賞の国語」を深めるためにも、さらに「情報処理の国語」に取り組む下地作りのためにも開講の意義を感じているのですが、高校生の授業開講状況も鑑み、このような結論といたしました。季節講習では特別講座として開講したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

指導理念について

物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう

私たちは、常にこのことを考え授業に臨んでいます。

皆様に第一志望の大学に合格できる力をつけていただくことはもちろんのこと、大学生、社会人になってからも役に立つものの考え方、見方を身につけていただきたいと考えているからです。

そのためには、身につけて欲しい力があると考えています。その力とは、「基礎力」「表現力」「実践力」の3つです。

基礎力: 数学における基礎知識について正しく理解し、計算できる力

問題を解く上で必要となる知識（計算法則、定理、公式）を、ただ丸暗記するだけではなく、「どうしてその計算法則や定理、公式が成り立つのか」の証明や類題演習を通して、しっかり考えることで、「使える知識」として吸収していただくことが大切です。

GNOBLEのテキストは単元別に細かく分冊されており、授業を受け復習することで、単元ひとつひとつの知識を確実に定着させることができるように作られています。

さらに、重要単元は繰り返し学習できるようにカリキュラムが組まれています。

表現力: 自分の考えを正しく表現できる力

実際の入試で得点するためには、自分の考えをしっかりと採点者に伝える力、つまり表現力が必要です。この表現力を養うためには、答案を第三者にしっかりと添削してもらうことが不可欠です。

GNOBLEでは、宿題ノートに自分の考えを表現してもらうことや、授業中の発言や発表、授業中に行う個別添削を通して、早い時期から表現力を養う練習をしていきます。

実践力: 問題を解く上で必要な知識を選択でき、それを組み合わせることができる力

各クラスの「基礎力」「表現力」を見ながら、担当者がクラスのレベルを判断し、最適な問題を選択して出題した応用問題をこなしていただくことで、実践力を養っていきます。

ここで大切なのが「あきらめず、自分の力で何とかしようという姿勢」です。内容的には難しい問題が多いと思いますが、問題が解けたときは自信が付き、たとえ問題が解けなかったとしても、いろいろ考えて解説を聴くのと、投げ出してただ解説を聞くのとでは数学力において雲泥の差が生まれます。

以上の力を養い定着させる為に、なるべく毎日数学に触れるようにしてください。

授業の進め方

GNOBLEでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、以下のような流れで授業を行っています。

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

新単元の導入

演習

確認

▼宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、必ず毎回の授業で宿題を出すことにしています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認と、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業の導入時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。また、頭の準備運動的な意味合いもあります。

▼新単元の導入→演習→確認

新しい内容の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正しく生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、演習中に教室を回り、答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

▼「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。

ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

▼宿題について

宿題も授業の一環であることを意識し、しっかりと取り組んでください。

中3までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。宿題をチェックした結果、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきますので、足りないと思われる部分については、授業内で復習する際に補うことができます。また、生徒自身も宿題をやることによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

宿題をやる上で大切なのが、分からない問題にも時間をかけて取り組むということです。

分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

実はテストの時、点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題をきちんとやるかやらないかで大きな差がでるのです。

例えば、中学3年生のαクラスでは、必ず毎回10題程度の大学入試問題を宿題として出しています。すると、1年間で約300題の大学入試問題を解くこととなりますので、1回1回の宿題を軽く考えていると、結果として大きな差が生じてしまうことになるのです。

ミス減らすことの重要性

数学は一問の配点が大きく、一つのミスが大きな失点につながる科目です。

実際、「テストの時、ミスが多い」という相談をよくお受けしますが、大切なのはミスをしないということよりも、「ミス減らすという意識をしっかりとつ」ということです。

代表的なミスの一つが、単純な計算ミスです。これは、明らかに演習量が不足していることが原因と考えられます。問題集などを利用して、普段からより多くの問題に触れることが何より効果的です。実際の試験になると試験時間のプレッシャーでどうしても焦ってしまうという人は、少し厳し目の時間を設定して、時間を計りながら問題を解いてみるのがよいでしょう。

また、ちょっとした見直しで防げるミスにも気をつけなければいけません。聞かれている内容に対して、明らかにおかしいと気づくことができるミス（例えば「辺の長さを答える問題で、答えがマイナスになっている」、「確率が1を超えている」、「sinの値を答える問題で、値が1を超えている」など数学的にあり得ないミス）の場合、少し答えを見直す意識と時間を作るだけで、防ぐことができるミスといえます。

中学数学から高校数学へ

中学数学のうちに是非、やっていただきたいことが、2つあります。

1つめは「計算力」を身につけるということです。高校数学では計算自体が複雑になる上に、立式をし、それを計算できることが当たり前に要求されますから、「しっかり正確に解ける力」が今まで以上に必要となります。また、問題に対して様々なアプローチを考える時間的な余裕も必要となりますので、「速く解く力」も必要となるのです。

この「計算力」は短期間で身につくものではないので、中学生のうちから計算問題演習を軽く見ることなく、正しく速く解くことを心掛けてください。

2つめは「数学的なものの見方を身につける」ということです。これは、最初に述べた3つの力のうち、「実践力」にあたる部分になるのですが、問題を解く時にどこに注目したらよいかを考えること、式が表わしている意味を考えること、出題者の意図をくみ取ることなどです。

基礎力をつけていくと、たくさんの知識の引き出しが出来ます。しかし、実際の試験で問題を解く時には、どの引き出しの知識を使ったらよいかをより迅速に、正確に判断することが大切です。高校数学の内容にはいると、身につけなくてはならない知識の量が圧倒的に増えます。その知識がひとつでも欠けると解けない問題が出てきてしまうため、高校数学では、まず、知識ひとつひとつを定着させていくことに、より多くの時間をかけていただきたいと考えています。ですから、比較的時間に余裕のある中学生のうちに、この「数学的なものの見方」「実践力」を身につけておくことが必要なのです。

もちろん高校数学でも「数学的なものの見方」を養うような問題は取り扱っていきませんが、中学数学のうちからこの力を養っておくことで、余裕をもって高校数学に臨むことができるでしょう。

実際の大学入試（特に国立大や難関私立大）の際に問われるのは、実はこの「数学的なものの見方」が出来ているかであり、受験の時にも必ず役立つことでしょう。

事実、東京大学、京都大学、一橋大学で整数問題や図形問題の出題頻度が高いのはこの数学的なものの見方が出来ているかを試すためなのです。

クラス分けテストについて

E1 ターム第3週に実施したクラス分けテストの平均点は下記の通りです。

	問 1	問 2	問 3	問 4	合計
中学 1 年生	29.58 (40 点満点)	11.13 (20 点満点)	10.15 (16 点満点)	17.05 (24 点満点)	67.90 (100 点満点)
中学 2 年生	23.19 (40 点満点)	14.89 (23 点満点)	13.74 (22 点満点)	5.41 (15 点満点)	57.22 (100 点満点)
中学 3 年生	25.45 (40 点満点)	11.61 (20 点満点)	8.71 (20 点満点)	10.10 (20 点満点)	55.87 (100 点満点)
高校 1 年生 【 α 系】	43.58 (72 点満点)	7.81 (14 点満点)	7.88 (14 点満点)		59.27 (100 点満点)
高校 1 年生 【 β 系】	28.14 (60 点満点)	2.86 (20 点満点)	5.29 (20 点満点)		36.29 (100 点満点)

得点よりも、自分がどこで間違えたかをしっかりと認識し、解き直しておくようにしてください。

各学年とも、問 1 は知識の定着を確認する問題となっていますので、日頃の宿題をきちんとやっていたら満点を取れる内容です。

次回のクラス分けテストは F1 タームに予定しています。

1. 英語を読む

次の文章は、Apple Computer の創設者 Steve Jobs 氏が 2005 年 6 月、スタンフォード大学の卒業式で述べた祝辞の一節です。

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers. Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking, and don't settle. As with all matters of the heart, you'll know when you find it. And, like any great relationship, it just gets better and better as the years roll on. So keep looking. Don't settle.

時として人生ではレンガで頭をかち割られるようなことが起きるものです。(しかし)信念を失ってはいけません。私を駆り立ててくれたのはただ一つ、自分のしていることが大好きだという気持ちだったと、私は確信しています。皆さんは自分が大好きなものを見つければいけない、それは仕事でも恋人でも同じように当てはまります。皆さんはこれから仕事が人生の大きな部分を占めていくでしょうが、自分が本当に心の底から満足を得たいなら進むべき道はただ一つ、自分が素晴らしいと信じる仕事をする事です。そして素晴らしい仕事をしたなら進むべき道はただ一つ、自分のする仕事が好きであることです。まだ見つからないなら、探し続けること。落ち着いてしまってもいいけません。心の問題と一緒に、そういうのは見つかるどんとくるものです。そして素晴らしい人間関係と同じように、年を重ねるにつれてどんどん良くなっていく。だから探し続けること。落ち着いてしまってもいいけません。

英語で文章を書いたり、英語で話をしたりするには英語を発信する力が必要ですが、それより前に、英語の文章が読め、英語を聞いて分かるという受信する力を身に付けていかねばなりません。ここで留意していただきたいのは、受信とは「読んで[聞いて]」意味が分かることであって、必ずしも「和訳することではない」ということです。例えば This is my house. のような文であれば、中1の夏を過ぎる頃にもなればイメージが脳裏に浮かび、和訳しなくても意味は分かるはずですが、しかし内容が抽象的になりイメージしづらくなると、日本語に置き換えた方が分かりやすくなります。冒頭の文章はテーマが生活に密着したもので抽象度が高いとはいえませんが、高校生になってから GNOBLE の門を叩く方のほとんどがこのレベルの英語が読めないのが実情です。以下のように読むのが GNOBLE 流で、授業の時にもこのように解説します。例として下線部を取り上げます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) that the only thing 唯一のこと(どんなこと?) that kept me going 私を進ませ続ける was は...だった(何だった?) that I loved 好きだったということ(何を?) what I did 私のすることが .

和訳問題の答案としてこのまま解答欄には書けませんが、十分に受信できていることはお分かりいただけたと思います。また、英語力が高まるにつれて、区切れ目は少なくなっていきます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) that the only thing that kept me going 私を進ませ続ける唯一のことは(どんなこと?) was that I loved what I did 私のすることが好きだったということ .

要するに「英語を読む」には、以下のようにすれば良いのです。

区切りを見つけて意味を捉え 自然に湧いてくる疑問と共に 左から右に読んでいく

2. 英語を聞く

「読む」際には文末のピリオドに到って「あれ？(分からない)」と感じたら、時間は失いますが文の初めに戻って読み返すことが可能です。しかし、冒頭の一節は『祝辞』として語られたものでした。「英語を聞く」場合には、音は聞こえた刹那すぐに消えてしまいますから、前に戻ることはできません。英語の語順のまま受信する必要は一層高まります。(ただし、聞く場合には話し手が意味の切れ目で一瞬ポーズを入れますので、意味の切れ目を誤解する可能性は低くなります。もちろん、英語を聴き取る耳が鍛えられていることが前提の話ですが。)

3. 文法力と語彙力

さて、ここで問題が2つ生じます。1つはどうすれば区切りを正しく見つけられるかということ、もう1つはどうすれば区切りの内側の意味が分かるかということです。

「区切りを見つけて」と言うのは簡単ですが、英語を読めない人は区切りを正しく見つけられませぬ。例えば先ほどの下線部を

I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.

のように区切ってしまったらどうでしょうか？正しく受信できる見込みはゼロです。また、convince という動詞を知らなければ、I'm convincedの意味は分かりません。そこで、文法力と語彙力が必要になります。

文法力 = 区切りを見つけ、区切り同士の関係を掴む力

GNOBLE では、特に中学生の間は英文法を重視していますが、それはテストの文法問題に正答するためというよりむしろ、区切りを見つけて区切り同士の関係[構文]を把握する力を培うためです。先ほどの下線部は、文法[構文]的には、I'm convinced_(SV) に続く that 節が

- [that the only thing_(S₁) (that kept me going) was_(V₁) [that I loved [what I did]]_(C₁)]_(O) で that は接続詞。be convinced の目的語になる [名詞節] を導いている。
- that は関係代名詞。先行詞である that 節内の主語_(S₁)を修飾する(形容詞節)を導いている。
- that は接続詞。that 節内の動詞_(V₁)の補語になる [名詞節] を導いている。
- what は関係代名詞。loved の目的語になる [名詞節] を導き、節内で did の目的語になっている。

のように(我々英語教師は)説明できますが、英語のネイティブはいちいちこのような分析をしながら読んでいたわけではありません。それは、我々日本語のネイティブが日本語の文法を意識せずに日本語を運用しているのと同じことです。

ここで気をつけなければいけないことがあります。それは、ネイティブは文法を意識していないだけであって、文法をしっかりと身に付けているのだという事実です。日本語のネイティブであれば、「『動く』という動詞は五段活用する動詞だから、『ない』に接続するときには未然形の『動か』という活用形を用いるのだ」などと分析することなく、「『動かない』は正しいが『動かない』は間違いだ」と瞬時に判断できますが、それは、文法が身に付いているからできることなのです。

GNOBLE では英文法を身に付けるために、中学生テキストの基本例文 = Sentences for Workout を全て*GSL 化し、*Workout を通じて意識せずに運用できるように指導しています。以下の英文は全て Sentences for Workout からの抜粋です。*GSL と *Workout については本資料の4. と5. で説明します

that: We are happy **that** you saw your mother again. 【中1E4 タームテキストより】

that: The novel **that** was written by the writer won the prize. 【中2夏期講習テキストより】

that: My first impression was **that** he was really funny. 【中3夏期講習テキストより】

what: I don't believe **what** you've just said. 【高1G4 タームテキストより】

Workout によって以上の文法事項をしっかりと身に付けている生徒は、I'm convinced **that** the only thing **that** kept me going was **that** I loved **what** I did.を切れ目を見つながら、返り読みすることなく、一度で意味を捉えることが可能です。

(英語科資料の最後に『参考資料2』としてここで引用した GNOBLE 英語テキストの文法説明部分を抜粋してあります。また、引用文中の下線部は、難しい語は1つありませんが、正確に意味を捉えるにはしっかりとした文法力が必要です。読み書きに必要な文法力の有無を確認したい方には、指標としてお読みいただけます。)

語彙力 = 区切り内の意味を捉える力

GNOBLE では中3の夏期講習から大学入試レベルの長文を読み始めます。文法を習得している生徒でも、英文の中に知らない語がたくさん出てきます。語彙の壁にぶつかるわけです。

未知の語があっても文脈から想像することは可能ですし、そうすることは非常に大切です。しかし一文の中に3つも4つも意味の分からない語があれば、想像するにも限界があります。そこで、相談に来る生徒がいます。「先生、単語がわからないから長文が読めません。市販の単語集を買って覚えようと思うのですが、どの単語集がおススメですか？」我々は回答します。「単語集で英単語と日本語訳を一対一対応で暗記するようなことはしないでください。板書で説明した語彙解説を写した『語彙ノート』を作って頻繁に目を通し、英語の本文を音読の Workout(後述)で頭に沁みこませてください。辞書を引いたら、必ず語源の説明を読むようにしてください」と。

漢字を「偏(へん)や旁(つくり)」を組み合わせると同じように、英語の語も、『接頭辞 + 語根 + 接尾辞』の組み合わせで意味をイメージすることができます。例として、**dict** という**語根**と**接頭辞**・**接尾辞**の組み合わせを挙げます。【 】内が意味のイメージ、「 」内が訳語です。

dictate = **dict** 言う + ate...させる 【言いつける;言って書き取らせる】「命令する;書き取らせる」

> dictator = dictate + or...する人 「独裁者,権威者;口述者」

> dictation = dictate + ion 名詞語尾 「指図,指令;書き取り」

diction = **dict** 言う + ion 名詞語尾 【言うこと,言い方】「言葉づかい,言いまわし」

> dictionary = diction + ary...に関する場所 【言いまわしが収録されている場所】「辞書」

predict = pre 前もって + **dict** 言う 【前もって言う】「予言する」

> prediction = predict + ion 名詞語尾 「予言」

contradict = contra 反対に + **dict** 言う 【反対を言う】「反論する;矛盾する」

> contradiction = contradict + ion 名詞語尾 「反論,矛盾」

> contradictory = contradict + ory 形容詞語尾(...の性質がある) 「反抗的な;矛盾した」

先の下線部に出てきた convince であれば、GNOBLE の授業ではどの講師も、**接頭辞 con** 全く、すっかり + **語根 vince** 征服する 【完全に(精神的に)征服する 思い込ませる】「納得させる,確信させる」のように板書して、同じ**語根**を含む convict, victory, victor, invincible などにも言及します。

高校生にもなると生徒は電子辞書を持ち歩くようになりますが、電子辞書に入っている英和辞典はほとんどが大修館書店の『ジーニアス』です。『ジーニアス英和辞典』(第4版)で convince を引くと見出し語と発音記号のすぐ後に、【原義:完全に(con)征服する(vince) 説得する。[派] conviction(名)】と説明されています。その兄貴分に当たる『ジーニアス英和大辞典』を引くと、【初 16C;ラテン語 convincere(征服する)より. con(完全に)+ vince(征服する). convictと同語源. cf.

victory, victor] と、より詳しく解説されています。また、三省堂の『ウィズダム英和辞典』(製本されている辞書を購入すると、無料でウェブ版が利用できます)では

con•vince ^{*} /kənˈvɪns/ [音声] [con(完全に)vince(征服する)] ((名)conviction, (形)convinced, 以下省略…

と出ています。英和辞典を引いたらこれらの説明を読むのを習慣にすることが必要です。

単語集で単語を覚えようとする試みは、泳げない人が、泳ぐのに必要な筋肉をウェイトトレーニングをして鍛えようとするようなものです。効果が全くないとまでは言いませんが、それが泳げるようになることには直に結びつきはしません。泳げるようになるには、泳いでみるしかないのです。泳いでいる(=英語を読んでいる)内に、泳ぐのに必要な筋肉(=語彙力)は自然と身に付いてゆきます。

4. GSL[GNOBLE Sound Laboratory = グノーブルの音声による演習]



GNOBLE の授業では英語の仕組みを理解してもらうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、理解したことを身に付ける訓練をしなければいけません。そのトレーニング[ワークアウト]をするために、6 学年全てに GSL という音声教材を導入しています。中学生は文法テキストの基本例文[Sentences for Workout]の音声を、高校生は長文の音声を、ウェブサイトで配信しています。暗証番号を入力して、MP3 形式で音声を簡単にダウンロードできます。

中学生には、Sentences for Workout の基本例文を何度も聴いて音読し、暗誦できるくらい親しんでくるという宿題を全学年・全クラスで課しています。翌週の授業の最後にその中から 3 本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聴き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につく、語彙も自然に増えていきます。

高校生には長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聴き、何度も音読するように指導しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしてゆくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになります。

5. 受講効果を上げるために

休まず・遅れず

英語の授業は中1から高1までは年間に 50 回です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題 授業 復習...】のサイクルを生活に組み入れている方です。【授業】を休むと、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題...復習】の学習サイクル全てを失うこととなります。中学生であれば、新出単元の導入授業も受けられなくなります。また、部活など理由はあるのですが、遅れてくるのも感心しません。5 分でも遅刻するなら、振替授業に出席することをお勧めします。

宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなければなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは Workout を継続して行うことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していることですが、確認のため掲載します。

中学生のワークアウト:小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

授業で「理解」したことを「身に付ける」ための具体的なトレーニング[Workout]

Listening[聴き込み]:授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。

Retention/Shadowing[口まね]:Retention は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。Shadowing は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。

Reading aloud[音読]:②の Workout で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき5回。

Recitation[暗誦]:③の Workout の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき10回。

Dictation[書き取り]:④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがいないかを確認する。

以上の Workout が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているのです、スラスラと解けるはずですよ。

高校生のワークアウト:読解問題に関しては、以下のワークアウトを継続して行ってください。

Listening[聴き込み]:授業で理解した GSL 対応の長文を題材にする。

1. 音声を聞きながら、意味を意識しつつ目で英文を追いかける。慣れるまで繰り返す。
2. 意味を意識しながら、繰り返し音声を聞く。(以上は電車の中での時間も利用する。)
3. 音声を聞き、目で英文を追いかけて、まねて声を出す。口がうまく回るまで繰り返す。

いずれの場合も、意味の切れ目を意識し、切れ目ごとに意味をイメージする。

Reading aloud[音読]:授業で理解した長文を題材にする。スラスラ読めるようになるまで音読する。目安は最低10回。音読の効用は、具体的には以下の三点です。

1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない[右から左へのいわゆる「返り読み」ができない]ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。= 1回読んだだけで分かる力がつく!
2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。= 速く読める力がつく!
3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているのです、文法や語彙が記憶に残りやすくなる。
= 英語力そのものが向上する!

6. 今後の予定

E2 ターム 1 回目の授業でクラス分けテストを実施しました。各学年の平均点は以下の通りです。
中1:61.8点 中2:57.8点 中3:40.2点 高1:44.1点

このテストの結果により、E3 タームから新クラスとなります。

冬期講習明けの F1 タームの授業内で次のクラス分けテストを行う予定です。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになります。冬期講習で学習するところまでが出題範囲ですので、当面の学習目標にしていただければと思います。

来年度、新中2から新高2は、現在開講している曜日で継続して英語をご受講いただける方向で調整中です。F1 ターム実施のクラス分けテスト結果発表時に、正式にお知らせ致します。

(以上本編)

参考資料 1 : GNOBLE 英語科カリキュラム

中1: 小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(の直後はテキストタイトル)

- 春期講習(4回) : スタートダッシュ講座 アルファベット/スプリングと発音の関係/基本ワード/センテンスの成り立ち
- G1 ターム(3回) be 動詞の文: am, are, is の使い分け 主格と所有格 冠詞
- G2 ターム(4回) 疑問詞・複数形・There 構文: 疑問詞を使う疑問文 (代)名詞の複数形 存在文 数量形容詞
- G3 ターム(3回) 一般動詞の文: have like, play, study 等 三人称単数 否定文と疑問文 命令文 Let's ~
- G4 ターム(3回) 非人称の it・助動詞入門: 非人称の it 助動詞 can, may, must, shall
- 夏期講習(8回) : 動詞1 / 動詞2 / 動詞総合 / 命令文 / 疑問詞1 / 疑問詞2 / 助動詞 / 現在進行形
- E1 ターム(3回) 動詞の過去形: be 動詞の過去形 一般動詞の過去形 (規則変化と不規則変化)
- E2 ターム(4回) 感嘆文・未来の文: 感嘆文 will と be going to
- E3 ターム(4回) 比較入門: 形容詞・副詞 原級を用いる比較 比較級を用いる比較 最上級を用いる比較
- E4 ターム(3回) 接続詞入門: 等位接続詞 副詞節を導く従位接続詞 (because, when, if 等) 名詞節を導く that
- 冬期講習(4回) : 動詞と時制1 / 動詞と時制2 / 助動詞 / 比較
- F1 ターム(3回) 不定詞入門: 副詞用法 (目的と原因) 名詞用法 (S と C と O)
- F2 ターム(4回) 文型入門: 品詞 文の要素・句と節 SV, SVC, SVO SVOO, SVOC

中1のE4まではひたすら文法を学習します。冬期講習から読解を導入します。
授業の最初の演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

中2: 小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(の直後はテキストタイトル)

- 春期講習(4回) : 動詞と文型 / 助動詞・時制 / 現在完了入門(前編) / 現在完了入門(後編)
- G1 ターム(3回) 不定詞・動名詞: 名詞用法の不定詞 動名詞 形容詞用法の不定詞 副詞用法の不定詞
- G2 ターム(4回) 文型: SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC
- G3 ターム(3回) 受動態入門・現在完了・接続詞: 受動態入門 現在完了 接続詞
- G4 ターム(3回) 関係代名詞と分詞入門: 主格の関係代名詞 目的格の関係代名詞 分詞の形容詞用法
- 夏期講習(8回) : 文型 / 不定詞1 / 不定詞2 / 動名詞・分詞 / 受動態 / 現在完了 / 比較 / 関係代名詞
- E1 ターム(3回) 準動詞: 名詞の働き 形容詞の働き 副詞の働き (初出の*分詞構文を含む)
- E2 ターム(4回) 接続詞: 相関接続詞や名詞節を導く if, whether を含む
- E3 ターム(4回) 疑問文: 修辭疑問 付加疑問 間接疑問
- E4 ターム(3回) 関係代名詞: *what と*非制限用法を含む(初出)
- 冬期講習(4回) : 中学英語の完成: 動詞とその周辺 / 不定詞・動名詞 / 分詞・関係代名詞 / 比較他
- F1 ターム(3回) 関係副詞・前置詞: *関係副詞初出 前置詞を体系立てて扱う
- F2 ターム(4回) 文型—復習と応用—: *原形不定詞初出

中2G4で「文科省学習指導要領中学範囲」が一通り修了。テキストやプリントで毎回読解を扱います。
Eターム以降は復習をしながら高校範囲の文法事項(*付きの事項)へと踏み込んで行きます。
授業の最初の文法演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

中3:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキスト(前半は文法テーマ別・後半は出題形式別)を配付

春期講習(4回):不定詞/動名詞・分詞/受動態・現在完了/関係詞

G1ターム(3回) 文法テーマ別:品詞と文の要素・文型 出題形式別:文法・語彙・読解

G2ターム(4回) 文法テーマ別:名詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

G3ターム(3回) 文法テーマ別:形容詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

G4ターム(3回) 文法テーマ別:副詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

夏期講習(8回):不定詞/動名詞・分詞/受動態/完了形/関係詞/接続詞/話法/前置詞

E1ターム(3回) 文法テーマ別:助動詞(法助動詞全て 助動詞の過去形) 出題形式別:文法・語彙・読解

E2ターム(4回) 文法テーマ別:完了形(完了時制全てと準動詞の完了形)とSVOCの文 出題形式別:文法・語彙・読解

E3ターム(4回) 文法テーマ別:仮定法 出題形式別:文法・語彙・読解

E4ターム(3回) 文法テーマ別:分詞構文 出題形式別:文法・語彙・読解

冬期講習(4回):大学受験に向けて高校レベルの読解力養成

F1ターム(3回) 文法テーマ別:複合関係詞・強調・倒置 出題形式別:文法・語彙・読解

F2ターム(4回) 文法テーマ別:比較表現 出題形式別:文法・語彙・読解

中3では全クラスで授業内に毎回、和訳問題などの添削を行っています。

夏期講習から大学入試の読解問題を扱い始め、F2までに高校範囲の文法事項を一通り修了します。

授業の最後の Sentences for Workout の dictation は、中学生最後の授業まで行い続けます。

高1:小ターム[G1 など]ごとに2冊のテキスト(Grammar & Writing と Reading & Listening)を配付

春期講習(4回):フレッシュアーズ講座(読解・リスニング・作文・文法)

G1ターム(3回) Grammar & Writing 1:不定詞 Reading & Listening 1

G2ターム(4回) Grammar & Writing 2:動名詞・分詞 Reading & Listening 2

G3ターム(3回) Grammar & Writing 3:分詞構文 Reading & Listening 3

G4ターム(3回) Grammar & Writing 4:関係代名詞 Reading & Listening 4

夏期講習(8回):不定詞・動名詞・分詞・分詞構文・関係代名詞・関係副詞・複合関係詞

E1ターム(3回) Grammar & Writing 5:比較表現 Reading & Listening 5

E2ターム(4回) Grammar & Writing 6:仮定法 Reading & Listening 6

E3ターム(4回) Grammar & Writing 7:接続詞 Reading & Listening 7

E4ターム(3回) Grammar & Writing 8:前置詞 Reading & Listening 8

冬期講習(4回):比較表現・仮定法・接続詞・前置詞

F1ターム(3回) Grammar & Writing 9:否定表現 Reading & Listening 9

F2ターム(4回) Grammar & Writing 10:特殊構文 Reading & Listening 10

高1になるとGSLが長文の音声になり、お帰りのdictationも、長文の穴埋め問題です。

英作文の添削指導を全クラスで行っています。

高2(春期からE4まで全39回)で高1の学習範囲を更に深めつつもう一度学習します。テキストは高1同様、Grammar & Writing と Reading & Listening (GSL対応)の2本立てです。夏期講習か

らどのクラスでも「要約問題」に取り組むようになります(授業内で添削後、解説します)。

高3(高2の冬期講習から【読解】と【作文・文法】各46回)になると、授業が【読解】と【作文・文法】に別れ、それぞれ2時間行います。どちらの授業でも毎回 Workout すべき GSL を配信し、相当量の宿題【テキスト】と演習【プリント】、添削【要約や英作文】を通じて、万全の英語力を養います。

参考資料2 : GNOBLE テキスト文法説明部分(太字になっている例文は本編3. で引用)

【中1E4 ターム「接続詞入門」より】

Section 3 that



—Sentences for Workout—

01 We know that she is from Okinawa.

...途中省略...

08 **We are happy that you saw your mother again.**

09 I'm afraid you can't come with me.

10 Are you sure that he will win the race?

01 彼女が沖縄出身であることを私たちは知っています。

...途中省略.....

08 あなたが再びお母さんに会えて、私たちはうれしい。

09 あなたは私と来ることができないだろうと(残念ながら)思います。

10 彼がそのレースに勝つと確信していますか。

中1テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

【中2夏期講習 Day 8「関係代名詞」より】

Section 1 主格の関係代名詞



Sentences for Workout

01 I know the man who came to see you.

02 The man who came to see you was American.

03 Do you know anyone who has seen a ghost?

04 Anyone who has seen a ghost can become a member.

05 The boy that is playing tennis is my classmate.

06 The boys that are playing tennis are my classmates.

07 This is the dog which bit me.

08 The dog which bit me was Bob's.

09 I went to the supermarket which opened last week.

10 The supermarket which opened last week stays open until midnight.

11 I'm looking for a novel that was written by the writer.

12 **The novel that was written by the writer won the prize.**

- 01 私はあなたに会いに来たその男性を知っている。
- 02 あなたに会いに来たその男性はアメリカ人でした。
- 03 幽霊を見たことがある人を誰か知っていますか。
- 04 幽霊を見たことがある人なら誰でも会員になることができます。
- 05 テニスをしているその男の子は私のクラスメートです。
- 06 テニスをしているその男の子たちは私のクラスメートです。
- ...途中省略...
- 12 その作家によって書かれたその小説は、賞を受賞しました。

中2テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

【中3夏期講習 Day 6 『接続詞』より】

Section 4 名詞節を導く従位接続詞



Sentences for Workout

- 01 That he is honest is quite certain.
- 02 It's surprising that you have finished the work so soon.
- 03 It's true that life in the city is convenient, but I prefer to live in a quiet place.
- 04 **My first impression was that he was really funny.**
- 05 The dictionary is really helpful, but the only trouble is that it has a few printing errors.
- 06 Do you know that he has been in a hospital?
- 07 I think I've met you before, but I can't remember your name.
- 08 I'm afraid that I will not be free until the examination is over.
- 09 Many people don't accept the fact that they are equal.
- 10 She asked if I felt better.
- 11 She looked around to see if anyone was watching her.
- 12 I don't know whether he will come or not.
- 13 Whether he is rich or poor doesn't matter to me.

- 01 彼が正直者であることはかなり確実だ。
- 02 その仕事をあなたがそんなにもすぐに終わらせたことは驚きです。
- 03 都会での生活は便利なことは事実ですが、私は静かな場所に住むことを好みます。
- 04 私の最初の印象は、彼は本当に愉快な人間だということでした。
- 05 その辞書は本当に便利ですが、唯一の問題は2,3の誤植があることです。
- 06 彼が入院しているのを知っていますか？
- 07 私は以前、あなたに会ったことがあると思うのですが、名前を思い出せません。
- 08 おそらく、私は試験が終わるまで暇にはならないでしょう。
- 09 多くの人間が、自分たちは平等であるという事実を受け入れない。
- 10 私の気分が良いかどうか、彼女は尋ねた。
- 11 誰かが彼女を観察しているかどうか確かめるため、彼女はあたりを見渡した。
- 12 彼が来るかどうか私には分からない。
- 13 彼が金持ちか貧乏かということは、私には問題ではない。

中3テキストの文法説明部分は、Sentences for Workout とその和訳のみです

【高1G4 ターム『関係詞』より】

Section 6: 関係代名詞 what

Sentences for Workout

- (1) What is important is to do it for yourself.
- (2) This is what everyone wants to know.
- (3) **I don't believe what you've just said.**
- (4) Concentrate your attention on what you are doing.
- (5) She is not what she used to be.
- (6) My sister is interested in what is called pop music.
- (7) He is a great politician, and, what is more, a good scholar.
- (8) Reading is to the mind what food is to the body.

- (1) 大事なことはそれを自分の力でやることです。
- (2) これが、皆が知りたがっていることです。
- (3) 私はあなたがたった今言ったことが信じられない。
- (4) 自分のしていることに、注意を集中させなさい。
- (5) 彼女は、以前の彼女ではない。
- (6) 私の姉はいわゆるポップミュージックに興味がある。
- (7) 彼は偉大な政治家で、そしておまけに、優れた学者だ。
- (8) 読書と精神との関係は、食べ物と肉体との関係に等しい。

関係代名詞の **what** は先行詞をその中に含んでいるので先行詞なしで用いる。(よって、制限用法しかない。) **the thing(s) which** に相当することが多い。例えば Show me **the thing which** you have in your hand. 「あなたが手の中に持っているものを見せなさい。」は Show me **what** you have in your hand. と同じである。それぞれの文で関係詞が導く節は以下ようになる。

Show me the thing_(#) (**which** you have in your hand). **which** が導くのは先を修飾する形容詞節
Show me [**what** you have in your hand]. 先をその中に含む **what** が導くのは名詞節

関係代名詞の **what** は名詞節を導くので、**what** 節は文中で名詞と同じ働きをする。

- (1) [**What** is important]_(S) is to do it for yourself.
- (2) This is [**what** everyone wants to know]_(C).
- (3) I don't believe_(#) [**what** you've just said]_(O).
- (4) Concentrate your attention on_(#) [**what** you are doing]_(O).

注意 Tell me **what** you want. の **what** は関係代名詞と疑問詞の両方の解釈を許す。関係代名詞なら「君が欲しいものを私に教えて」となり、疑問詞なら「君が何を欲しいかを私に教えて」の意味になる。後者は疑問詞が導く名詞節[間接疑問]である。(以下省略...)

高校生の文法テキストに解説があるのは、授業で導入からの説明はもう行わないためです。
高校生の Sentences for Workout の英文は8割方 GNOBLE の中学生テキストから採っています。